Chapter 3 : **ダークネス・ロード覚醒 パート2**

その夜、小屋の中。  
マフォクシーは星図に杖をなぞらせ、静かに思考を巡らせていた。

ゲッコウガは腕を組み、黙って彼女を見ていた。

｜「未来が見えてるんじゃなくて…選択肢を計算してるだけだろ」と、彼が呟く。

マフォクシーは目を上げずに頷く。

｜「その通り。見えるのは…流れの分岐点よ。  
｜未来は定まっていない。無数の選択で織られる布みたいなもの。」

彼女は星図の一つの道を指し示す。

｜「でも…過去は違う。何度でも再生できるわ。すべての原因は、どこかに残響を残すから。」

ゲッコウガが近づき、彼女の肩に手を置く。

｜「だから…君は本物なんだ。運命を語らず、パターンを読む。」

マフォクシーは微かに微笑む。「そして今、見えるのは…街を縫い込む闇の糸。」

その夜の田舎道、雨の中を走る2つの影。  
それは双子の盗賊、ソウブレイズとグレンアルマ。  
遺跡や放棄された祠を襲ってきた者たちが、今夜狙うのは──復活した闇の城。

｜「なあ…ここ、本当に呪われてねえよな？」とグレンアルマが囁く。

｜「呪いだろうが何だろうが、変人どもはレア物を持ってんだよ」とソウブレイズが返し、刃を雨にちらつかせた。

彼らは静かに城内へ──  
不気味な廊下をすり抜けたその時、雷鳴のような声が響く。

声。約束。  
…そして、売り文句。

｜「富も力も…もうパンくずは必要ない。」

割れたアーチの隙間から覗き込むと、そこには幻影のように旋回するレックウザ──第四の姿。  
その上階から見下ろすのは、目を光らせるダークライ。

｜「やはりネズミどもが来たか。ちょうど良い…ネズミが必要だった。」

ソウブレイズが刃を構え、グレンアルマが炎を灯す──  
だがその瞬間、部屋は黒煙に包まれ、息すら詰まるほどの影が満ちる。

｜「黙って仕えろ。さもなくば悲鳴をあげて肥料になれ。」

二匹は目を合わせ…そして、跪いた。